



諏訪市地域医療・介護連携推進センター

ライフドアすわ

開所式

(7月9日)

～命をつなぐ扉（ライフドア）の活動をめざします～



◆諏訪市地域医療・介護連携推進センター「ライフドアすわ」開所式挙行

4月に設立された諏訪市地域医療・介護連携推進センター「ライフドアすわ」の開所式を7月9日に挙行しました。医師会館2階での開所式を前に、医師会玄関にて小松会長と金子諏訪市長がライフドアすわの真新しい看板を設置するセレモニーを行いました。看板の色は、ライフドアすわのイメージカラーのグリーンです。

開所式には、来賓に諏訪市長、諏訪赤十字病院長、諏訪市社会福祉協議会会長、諏訪保健福祉事務所副所長、諏訪市歯科医師会長、諏訪薬剤師会長をお迎えし、ご祝辞をいただきました。また、市や日赤、社協の関係機関、加えて市内の医療・介護関係事業所などから合わせて99名の出席があり、記念すべき日を盛大に迎えることができました。

この後、蟹江副センター長がライフドアすわの取り組み事業について説明し、本格

的な活動をスタートしました。

開所式の出席者の皆様にアンケートを取ったところ、ライフドアすわに期待することとして、○医療と介護の連携システムの構築 ○施設や現場の様々な課題を共有できるよう情報交換を推進して、課題解決役として活躍してほしい ○医療と介護の連携の具体策や解決方法等を講演会などで報告してほしいなどの意見をいただきました。皆様のご期待に沿えるよう努力していくたいと思います。



◆認知症講演会

開所式に引き続き、ライフドアすわのキックオフ事業として「認知症講演会」を開催しました。



安出先生の講演



宮坂先生の講演

松本先生（センター担当理事）が座長を務め、講師の諏訪赤十字病院神経内科部長 安出卓司先生には「諏訪赤十字病院における認知症診療～認知症診断パスの現状～」、宮坂医院の宮坂圭一先生（センター長代行）には「地域医療と認知症」と題して講演していただきました。パワーポイントを交え、日赤と諏訪地域のかかりつけ医との認知症診断パスの流れや認知症の人を地域で支えていくための支援の仕方などをわかりやすく話していただきました。

認知症総合支援事業は、ライフドアすわが取り組む4事業のひとつです。キックオフ事業としてふさわしい趣旨の講演会をということで演題を決定したものです。

◆諏訪市地域医療・介護連携 推進センター開設によせて

～人生のファイナルステージを
生きぬくために～

センター長 小松 郁俊



諏訪市医師会館玄関に看板プレート設置
(金子諏訪市長と小松センター長)

人の寿命は、いつか終末を迎える。医者である私たちも、年齢を重ねて、死を免れることはできません。人生の終末に向かって、どう生きるか、そして何ができるのか。自分自身の人生と重ねて地域の医療に向き合っていくことを大切にしていきたい。私はそう思っていますが、どうでしょうか。

「ライフドアすわ」。その実現には長い道のりがありました。

はじめに

まだ、諏訪に帰ってクリニックを開院する前ののことでした。もう30数年前のことでしょうか。千葉県のある駅を降りて、アルバイト先の病院に歩いていく途中、ふと周囲を見回すと、不思議なことに気が付きました。駅の近くは高齢者だけが暮らし、その先は中年の世帯。さらに進むと子育て世代の住宅。現代社会では、子供たちは成人すると別居して新居を作る。そうか！街も歳をとるのだ。患者さんの病気を治しても、なかなか自宅に帰れない。家族は何をしているのだ。当時、大学病院で最先端の医療に取り組んでいた自分は、患者さんの生活環境のことなど考えたこともありませんで

した。

予想もしないことは、人生にままあることです。故郷の近く、諏訪の中洲地区が無医地区になって困っていると、当時の笠原諏訪市長から要請があつて開業することになりました。見渡す限り周囲は田園風景。八ヶ岳から風が吹き渡り、東京育ちの妻の不安そうな顔を、今でも思い出します。患者さんたちは、隣人であり、友人もある。そうか！この人たちと一生暮らすのか！衝撃でした。そこで医療だけでなく、一緒に地域づくりをして、一緒に公園を作り、相撲大会や映画会を開き、ウォーキングコースを造って大会を開催し、ボランティア組織を結成して、地域の活性化につとめました。地域に暮らす一人一人の命を守るためにには、地域全体で支えあわないと生きていけない。つくづくと実感しました。

平成7年に諏訪市健康文化都市づくり市民協議会を結成し、平成10年には諏訪市まちづくり市民協議会を結成し、行政と協働のまちづくりを諏訪市全域において取り組みました。その会長に私が、副会長には宮坂圭一先生になりました。その後、長年にわたり在宅医療に取り組みながら、地域でさまざまな街づくり活動やボランティア活動を行ってきました。

それから20年。地域包括ケアが呼ばれるようになりました。日本全国の街が歳をとり、高齢者だけが暮らす地域が広がって、地域全体で支えあわないと生きていけない。そんな時代へと突入してしまったのかもしれません。

平成27年に私が医師会長になり、宮坂圭一先生が副会長になりました。いよいよ包括ケアシステムを諏訪市が実施しなければならないこととなり、その検討に諏訪市医師会も呼ばれました。最先端の医療からは置いて行かれた二人でしたが、市民を相手のまちづくりなら昨日までしていた二人でした。一人では無理でも、二人で力を合わ

せればなんとかできるかもしれない。二人とも居宅介護支援事業所などを医院に併設していましたので、医療・介護・福祉・市民ボランティア活動など、これまでの活動がみんなの役に立つ機会が来たかもしれません。そう思いました。

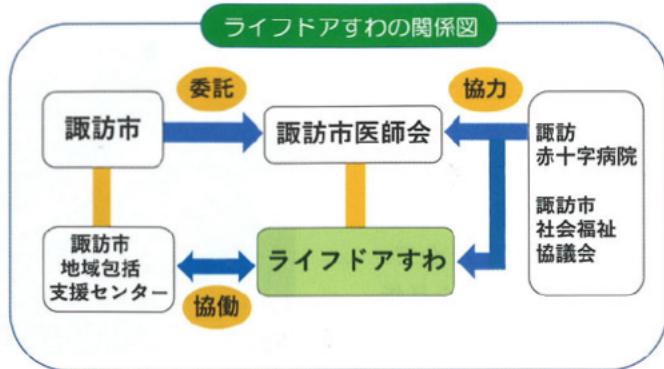
経過

さて地域包括ケアシステム。何とか活動に漕ぎつけようと数年来、諏訪市においても諏訪赤十字病院・諏訪市医師会・介護福祉施設などが集まって検討がなされていました。地域包括ケアサポートセンターの構想を、どのように具体的にするのか、長い期間の検討があったわけですが、医療と介護、この二つをつないで実際に活動させるには、大きな溝がありました。医療を知り、介護に携わる。それだけでも限られるのに、市民ボランティア活動との関わりや認知症が解かることも必要になる。いったいどうしたらできるのか？とても諏訪市医師会だけでできる事業ではありませんでした。

その結果、諏訪市医師会・諏訪赤十字病院・諏訪市社会福祉協議会が協力して、「諏訪市地域医療・介護連携推進センター」を諏訪市医師会館に設置して、代表して諏訪市医師会が受託することになりました。

実は、平成14年から、諏訪市社会福祉協議会と諏訪赤十字病院と諏訪市医師会有志が連携して、「西山の里」において、西山地域のデイサービスに訪問看護・地域ボランティアが協力する施設運営を目指して活動してきました。平成19年からは「諏訪在宅医療懇話会」として、諏訪赤十字病院と諏訪市医師会有志で多職種の人達のための在宅医療・看護・介護の勉強会を開催してきました。さらに平成26年からは諏訪市と協働して「多職種連携の研修会」を開催してきましたし、諏訪赤十字病院とは「諏訪市医師会と諏訪赤十字病院との研修会」を開催していました。

こうした経過がありましたので、諏訪市



医師会が諏訪市、諏訪赤十字病院、そして諏訪市社会福祉協議会と連携し、それぞれの役割を分担して、事業を展開するのは初めてのことではありませんでした。そして、諏訪市医師会内で慎重な検討が行われました。

医師会の受託

平成29年4月に「諏訪市地域医療・介護連携推進センター」を諏訪市より受託して、医師会館に開設し、準備活動を開始することができました。そして7月9日に、金子諏訪市長、大和諏訪赤十字病院長、松木諏訪市社会福祉協議会会长など多くの参列者を迎えて、正式な開所式を挙行し事業を開始いたしました。この日は諏訪市医師会にとって画期的な事業が始まる記念すべき日となりました。

名称

正式名称は、「諏訪市地域医療・介護連携推進センター」ですが、たいへんに長い名前なので「ライフドアすわ」と、愛称をつけました。

「誰もが、いつでも困ったときに、その扉を叩いていただけるように。そしてその扉を開ければ、自分の命をつないでいくことができるよう」、これから活動していくみたいと思っています。

事業の内容

「在宅医療・介護連携推進事業」、「生活支援体制整備事業」、「認知症総合支援事

業」、「地域ケア会議推進事業」。諏訪市地域包括支援センターと協働しながら、この四つの事業を柱に、諏訪市全体として、医療と介護の連携を模索し、多職種の連携を図る。そして切れ目のない在宅医療と在宅介護の提供体制を構築していく。そのためには、諏訪市歯科医師会・諏訪薬剤師会の先生方や、特養・老健・デイサービスなどの事業所や介護職の方々、ケアマネジャー・訪問看護の方々、そして地域のボランティア活動をしている市民・民生委員などの方々と連携して事業を展開していきます。従ってその活動は、時に重層し、時に多重に、時に交錯していくことになります。この事業は従来の縦割り行政で考えることはできません。

三つのポイント

地域包括ケアにおいて、地域の医療と介護を支える仕組みを創りあげるのに、三つのポイントがあります。

- ① 医療・介護の総合的な窓口機能（ワンストップで多様な相談・問題に対応）
- ② 人材の育成と確保（多職種の連携）
- ③ 住民・地域・行政への周知（双方向のコミュニケーション）

「ライフドアすわ」は、このポイントを把握した事業を展開していきたいと思います。

医師会が行うこと

医師会が、何故、こうした事業に取り組

んでいくのか、不思議に思われる方もおいでだと思います。現在、諏訪市医師会は「支えあう医療を求めて」ということをテーマとして取り上げて活動しています。実に、一人の生命を守るためにには、一つの医療機関だけでは守れない。医療機関相互の連携、介護施設や行政や市民と協力するなかで、地域全体で支えあう医療というものをを目指して活動していくこと、そのことは地域包括ケアシステムの目指すものと、同じ方向を向いたものがありました。

日本医師会は「医療は、まちづくりである」と、言っています。水道や電気やガスが無いと私たちは暮らせません。それと同じように、医療が無くては暮らせません。地域の人達が、諏訪の市民が、住み慣れた地域で、生涯、安心して暮らしていくことができるよう、多くの関係者のお力を借りながら、関係機関が一体となって活動し、諏訪の地に地域包括ケアシステムを実現していきたいと思っています。

「医療と介護」それは一人の患者さんを支える表と裏、右と左、蓋と容器。しっかりととした連携が求められています。

背景

医師会が行う事業は、たいへんに幅広く、多岐にわたっています。日常の診療のみならず、市民検診、予防接種、学校医、産業医、災害時医療、当番医など、休む暇もない状態です。そのなかで、高齢社会における認知症やフレイルなどへの対策に取り組んでいく必要が生まれてきました。どうして食べられないのか？どうして歩けないのか？どうしたら治るのか？最終的な判断と責任は、常に医師に求められます。

事業の展開

人生のファイナルステージをどう生き抜くのか。

最後まで、自分で食べたい。そして歩きたい。買い物もしたいし、風呂に入りたい。できるだけ自宅で過ごしたい。どれも自分



一人の力だけでは解決できません。顔の見える関係づくりは、医療と介護だけではなく、地域そのものに作り上げていく努力と仕組みが求められています。完璧なものはありませんし、その地域、地域によって異なる多様性を甘受しなければできません。

ここ諏訪市のなかでは、諏訪市の現状と力に合わせた解決方法しかありませんが、糸余曲折することを恐れたら一歩も踏み出せません。踏み出した足元に道が生まれる。そう信じることから、今日の一歩を踏み出してみたいと思っています。

「ライフドアすわ」の組織を創り、規則を創り、計画を創り、人材を集めのに半年、それを実際に運営できるようにするまでに半年を費やしました。頭のなかで組み立てたことを実現するのは、容易なことはありません。無理を聞いてくださった関係者の方々に感謝しています。そして幸いなことに、蟹江副センター長、河西事務部長はじめ優秀なスタッフがそろいました。宮坂副会長、松本理事にも大きなご協力をいただいています。誰もやったことのない仕事を一から組み立てていく難しい仕事をありましたが、何とか一歩を踏み出すことができました。毎日が新しい仕事であり、心身共に疲れたと思います。毎週、運営会議で検討し、毎月、諏訪市地域包括支援センターと協議しています。そして決めたら実施しなくてはならない。みんなの創意工夫が素晴らしい。そして見えない道に一歩足を踏み出す勇気を持って下さったことに

心から感謝しています。

最後に

いつまでも健康で過ごしたい。健康寿命を保ちたい。そのためには介護予防の段階から、かかりつけ医との密接な協力関係が必要となります。

人の生命は、一生に一回、たった一つしか持つことができない。

その大切な生命に携わっている人達が連携し、諒訪に暮らす一つひとつの命をみんなで大切にしていきたい。困ったら、「ライドアすわ」の扉を叩いてくださることを期待しています。

最後になりますが、「ライドアすわ」の開設に、ご尽力いただいた金子諒訪市長、大和諒訪赤十字病院長、松木諒訪市社会福祉協議会長、そして諒訪市地域包括支援センターはじめ全ての関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

◆資料

●名称「諒訪市地域医療・介護連携推進センター」

愛称「ライドア すわ」

●受託 諒訪市医師会

●協力 諒訪赤十字病院、諒訪市社会福祉協議会

●設置 平成29年4月 活動開始 平成29年7月9日

●設置の目的と業務の概要

諒訪市地域包括支援センターと協働し、

①在宅医療・介護連携推進事業、②生活支援体制整備事業、③認知症総合支援事業、④地域ケア会議推進事業を一体的に実施

- ・高齢者個々の状況に応じた適切な在宅医療・介護の提供を行うことができる連携体制を構築する。
- ・高齢者の生活支援等サービスの体制整備を推進する。
- ・認知症専門医による指導のもとに認知症初期集中支援チームを実施する。
- ・多職種協働による事例検討などを行い、地域のネットワーク構築、課題の把握を行う。

●各事業の主な内容

①在宅医療・介護連携推進事業

医療・介護関係者の情報の共有の支援、コーディネートの推進、在宅医療・介護連携に関する相談支援(入退院への対応など)、医療・介護の資源の把握、マップ化、地域ケア会議などを活用した在宅医療・介護連携の課題の抽出と対応策の検討、切れ目のない在宅医療と介護の提供体制の構築推進、医療・介護関係者の研修開催及び各実施機関との調整、地域住民への普及啓発など

②生活支援体制整備事業

生活支援コーディネーターの配置、地域のニーズの把握、サービスの担い手の養成、各事業者などの提供サービスのリスト・マップの作成、生活支援体制整備に係わる協議など

③認知症総合支援事業

認知症初期集中支援事業、認知症地域支援・ケア向上事業、認知症講演会の開催・運営など

④地域ケア会議推進事業

医療・介護に関わる多職種連携会議、地域課題の解決策の検討、地域のネットワークの構築など



●「ライドアすわ」のマスコット「ふくろう」について

ふくろうは、知恵を表したり、福来郎・不苦労とも書き、幸せの象徴、縁起鳥です。皆の知恵を結集して幸せな地域づくりをしたい、という意味合いを込めています。